

ダイアナ 米国出身、元モルモン教徒



私はコロラド州の、一般的なキリスト教徒の家庭で生まれ育ちました。私の家では、宗教が話題に上がることは殆どありませんでした。私の父はモルモン教徒、母はプロテスタントとして育ちました。私は成長するにしたがって、神が存在するのか、そしてもし存在するのならそれが人間にとってどういう意味を持つのかということに、興味を持ち始めました。私は真面目にバイブルやその他のキリスト教文学の勉強をしました。高校生の時の私でさえ、バイブルに、特にイエス（神の平安あれ）の性質について明らかな矛盾に気付いていました。ある箇所では彼が神であるとし、またある箇所では神の子、そして別の箇所ではただの人であると言っているかのようでした。私はそれらの矛盾が、私自身の未熟な理解力から来るものだと思っていました。まず私は、その出版物を郵便で受け取ったことをきっかけに、「チャーチ・オブ・ゴッド」に入会しました。彼らは宗教に対して論理的かつ科学的なアプローチをとっていたため、興味を惹かれたのです。彼らは豚肉の摂取を禁じたり、イエスと同じ祝祭日を採用したりしていました。私は彼らの集会に一度行ったきり、なぜかそれ以降は行こうという気持ちになれませんでした。

大学に入学すると、私は「キャンパス・クルセード・フォー・クライスト」主催のバイブル学習会に参加するようになりました。私はバイブル学習を通して、神についての真実の理解を求めていましたが、結局それが何であるかは分かりませんでした。同じ時期に、私はムスリムの男性と知り合いました。私は彼のする礼拝がなぜあのような形なのかに興味を持ったので、クルアーンを読み始めました。間もなくして、私はイスラームにあるもので、キリスト教に欠けていたものが何であるかに気付いたので、それは崇拝の方法です。それまで私が知っていた礼拝とは、ただ「私

はこれが欲しい、これが必要だ、私にお与えください」といったもので、その中でも本当の崇拝に該当するものは、「イエス様、私の罪のために死んでくれてありがとうございます」だけでした。私は思いました。では、神についてはどうだろう、と。私はイスラームの神が、私の信じていた神と同じ神であることを確信していましたが、イエスが誰なのかということについては、まだ確信出来ませんでした。私は、彼が神の子ではないといことを信じることを怖れていました。なぜなら、そういった信条は地獄での永久の懲罰に値する、と小さい時から教えられてきたからです。

私が通っていたバイブル学習会のリーダーは、アルジェリアでムスリムへの伝道に携わっていたため、彼にいくつかの質問をすることにしました。当時、私は非常に混乱していたからです。彼に私のムスリムの友人の来世について尋ねると、彼は間違いなく地獄に行くと言いました。また、バイブルに非常に似通っているクルアーンがどうして偽物であるか尋ねると、彼はそれが人々を不信仰者へ貶めるための悪魔の道具であると答えました。そして最後に、私は彼にその中の記述について質問したかったので、彼がクルアーンを読んだことがあるか尋ねましたが、彼の答えはこうでした。「いや、そうしようかと思っただけでむかむかするんだよ。」私は驚愕し、その場を立ち去りました。私が博学なリーダーとして尊敬し、ムスリムたちとも何度か活動をしていたこの男性は、私が過去数カ月でイスラームについて学んだことよりも多くを知っていたわけではなかったのです。彼は特別、知識を求めていたわけでもなかったし、好奇心を持っていたわけでもありませんでした。それにも関わらず、彼は私の友人が地獄に落ちること、そしてクルアーンが悪魔の所業であることを確信していたのです。私は、それについて学んだのでもない限りは確信することなど出来るはずがないなのに、彼は明らかにそれを怠っていたことに気付きました。このことは、イスラームが神の真理についての道だということの手がかりとなりました。あの会話を持つことが出来たことに、アルハムドゥ・リッラー（神に称賛あれ）。

私はもっとクルアーンを学び出し、その数カ月後にシャハーダ（イスラームを受け入れるという信仰の宣言）をしました。あれからまだ一年も経っていません。私は現在も学びの最中で、神の真実を求め続けています。私は神が導いてくれたことにとっても感謝しています。これは、論理と理性による厳しい審査をものともしない真実の宗教なのですから。私は常々、宗教とはそうあるべきだと思っていました。それは筋の通った、論理的なものであるべきなのです。

これが、私がいかにしてイスラームに入信したかの顛末です。ただ、私がムスリムになる前に、多くのムスリムと出会わなかったことに感謝しなければなりません。私が通っていた大学の大半のムスリムたちは冷ややかで、よそよそしい人々だったからです。彼らは非ムスリム、またはそう見える人たちに対して偏見があったように見えました。ムスリムの代表であるべきはずの彼らがとても冷酷に見えたため、もし私がそれらの人々と知り合いだったなら、私はイスラームから距離を置いていたかも知れません。ムスリムは共有すべき素晴らしいメッセージを持っています。それは真実のメッセージなのです。私は友人と知り合うまで、イスラームとは何かについて全く知る由もありませんでした。もしもアメリカ人がそれを理解したのなら、彼らはそれに対し、よりオープンになるはずなのです。なぜなら、それは真理なのですから。

また、これは私がいままで通り抜けてきたことの中でも、最も困難なものの一つだったことにも言及しなければなりません。イスラームへの改宗は、両親への反抗を余儀なくされました。なぜなら彼らは断食や、ヴェールの着用、禁忌食品の忌避などに合意しないからです。彼らはそれらがばかげていると思っており、私は自分の信じることを貫くことと同時に、家族を失わないよう気をつけなければなりません。私はまだヴェールを着用出来ていませんが、近いうちにそう出来るようになることを切に願っています。もしもそうすれば、(一時的であれ) 勘当されるかも知れませんが、それでもそうしたいと思っています。なぜなら、私は神によって女性に定められていることを実行し、慎み深くありたいからです。